HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	震災復興期におけるゲストハウスの機能と可能性に関する一考察
Author(s)	石川, 美澄
Citation	「東日本大震災現地調査報告会」報告書. p.25-27.
Issue Date	2012-04-06
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49127
Type	lecture
Note	2011年度 東日本大震災現地調査報告会. 平成24年4月6日（金）. 北海道大学大学院　国際広報メディア・観光学院.
File Information	disasterreport_ishikawa.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

震災復興期におけるゲストハウスの機能と可能性に関する一考察

観光創造専攻 博士後期課程
石川 美澄
ishikawa@cats.hokudai.ac.jp

１．はじめに

本稿の目的は、宮城県仙台市内において震災以前から開業し、営業を続けている宿泊施設型のゲストハウス（以下、ゲストハウスとする）「宮城ゲストハウス宿や萩（以下、宿や萩とする）」と、震災以後に開業した「ゲストハウス梅鉢（以下、梅鉢とする）」の震災後の取り組みに関する現地調査結果を基に、震災復興期におけるゲストハウスの機能と可能性について考察することである。

２．現地調査の概要

現地調査は、2011 年 12 月 12 日から 16 日までの期間に実施された。調査手法は、上述 2 つのゲストハウスオーナー[1]とヘルパー[2]の計 4 名に対する半構造化インタビューとし、現地調査は筆者 1 名によって行われた。主な質問は、宿や萩に対しては、①開業経緯、②震災当日の状況、③震災直後に行った活動（シャワーの開放やボランティアチーム結成）について、④そういった活動に関して地域の人びとから寄せられた声、⑤ボランティアの受入時期、⑥現在の宿の状況（客層など）の 6 点である。梅鉢に対しては、①②以外に、③震災後から開業に至るまでの間で特に印象に残っていること、④震災後の復興関連の活動について、⑤現在の宿の状況（客層など）の 5 点である。

３．宮城県仙台市と 2 つのゲストハウスの概要

宮城県仙台市は東北地方最大の都市といわれ、推計人口約 105 万人（2011 年 12 月 1 日現在）、総面積 788.09 平方 km の政令指定都市である[3]。仙台市が発表した『東日本大震災仙台市被害状況（平成 24 年 3 月現在）[4]』によれば、2011 年 3 月 11 日当日に観測された市内震度は、梅鉢がある宮城野区では震度 6 強、宿や萩がある青葉区では震度 6 弱だった。人的被害は、仙台市民の方が 872 名[5]、市内で死亡が確認された方が 797 名、行方不明者 32 名、負傷者 2,269 名だった[6]。建物の全壊は 29,000 棟以上であり[7]、被害推計額はおよそ 1 兆 2,823 億円である[8]。

次に、宿や萩と梅鉢の概要を示す。宿や萩は、JR 仙台駅から徒歩約 10 分のところに位置

---

[1] ここでは、ゲストハウスの経営兼運営者のことを指す。
[2] 宿泊費用を自己の労働力などを提供することで相殺とする個人の役割の 1 つ。
[3] 仙台市公式ホームページ参照 http://www.city.sendai.jp/（アクセス 2012_03_20）。なお、推計人口に関しては宮城県公式ホームページ http://www.pref.miyagi.jp/を参照した（アクセス 2012_03_20）。
[4] http://www.city.sendai.jp/soumu/kouhou/bousai/0311jishin/higaizyoukyou.pdf（アクセス 2012_03_20）。
[5] 市外での死亡者 168 名含む。
[6] 2012 年 3 月 6 日午前 11 時現在。
[7] 2012 年 2 月 26 日現在。
[8] 2011 年 10 月 28 日時点の推計額。

する 2010 年 7 月開業のゲストハウスである。基本的に 30 代男性オーナーが 1 人で運営しているが、繁忙期などにはヘルパーを募集する場合もある。設備面では、個室と男女別の相部屋が配されており、キッチンやシャワー、トイレなどは共同利用となっている。ただし、震災後、ボランティアなどが増加し男女別の部屋割りが困難になったことから、現在は男女混合の相部屋制を採っている。

一方の梅鉢は、2011 年 8 月に開業した比較的新しいゲストハウスであり、JR 苦竹駅から徒歩 10 分弱のところに位置している。2,30 代の夫婦によって日々運営されているが、宿や萩と同様にヘルパーを募集する場合もある。設備面では、個室や男女別の相部屋が配され、シャワーやトイレは共同利用である。ただし梅鉢では、夕方以降は 1 階の土間部分がバースペースとなり、酒や軽食を提供する飲食業も兼ねている。そのため、キッチンの利用はスタッフ（オーナー夫婦やヘルパー）に限られている。

４．震災復興期におけるゲストハウスの機能と可能性

4-1. 調査結果

震災以前から営業していた宿や萩は、震災当日は激しい揺れに見舞われながらも、建物が倒壊したり備品が大きく破損したりするなどの目立った被害はなかった。そのため、電気や電話が復旧した震災 2 日後[9]の比較的早い時期から、宿泊希望者を受け入れることができた。宿泊者は、まず初めに岩手などの取材を目指す報道関係者であり、次に復旧工事関係者だった。その後は、ボランティアの人びとが宿泊し、連日満室が続くことになる。そして、筆者が現地調査で訪れた時点では、比較的長期で宿泊するビジネス旅行者[10]が多く見受けられた。

宿や萩に宿泊するボランティアの人びとは、ボランティア団体などに入らずに単独・個人で被災地に入り、現地のボランティアセンターを通じて活動する人びと（以下、個人ボランティアとする）が多かったという。オーナーは、個人ボランティアが多く宿泊した理由の 1 つに、「ボランティア団体に参加した上で現地入りをする人達は、その団体が確保した場所を寝床として利用できているからではないか」と話す。また、宿や萩では震災 2 日後からゲストハウス内のシャワーを近隣の人びとに貸し出したり、近くのボランティアセンターに宿泊者を受け入れることができる旨を伝えたり、ボランティアチーム「チーム萩」結成のきっかけの場となったりするなど、オーナーや宿泊者らによって様々な取り組みが実践された。

一方、震災後の 2011 年 8 月に開業した梅鉢も、開業当初から個人ボランティアを中心に、ビジネス旅行者や観光者などによって利用されることとなる。開業後、梅鉢のオーナーは、宿泊者の中にボランティアを希望する人びとから、「ボランティアの内容が想像していたのとは違った」という意見や、一部の宿泊者からは、午前中だけあるいは一日だけなどの空いた時間にボランティアをしたいという声を耳にするようになる。そのことが 1 つのきっかけとなり、オーナーは「それなら自分自身が動こうと思うようになった」という。そして、オーナーは、実際に近隣のボランティアセンターや仮設住宅の現状を見て回るようになり、その過程で宮城野区の市民センターの関係者 A（仮名）と面識をもつようになった。その後は、ボランティアを希望する宿泊者の希望や経済的・時間的制約を踏まえるなどし

[9] 電話復旧後、予約問い合わせの電話が相次いだという。
[10] ここでは、出張など業務で仙台を訪れる者のこととする。

て、宮城野区のボランティアセンターを紹介したり、関係者 A やオーナー自身あるいはヘルパーの個人的なネットワークを活用したりしている。オーナーは、「ボランティアをしたいという人と、ボランティアの力を求めている場所や人とを結びつける場に、自分たちがなり得るのではないかと考えるようになった」と話し、また両者の「マッチングを手伝えれば良い」とも考えているという。

4-2. 宿泊施設ならびに地域内外の橋渡し役としてのゲストハウス

現地調査の結果から、震災後のゲストハウスに求められる機能は、宿泊機能というゲストハウスの基本的な役割であったことが明らかになった。それと同時に、ゲストハウスは、宿泊者と地域の人びとあるいは地域が抱える課題とを仲介する橋渡し役としても機能していることが明らかになった。ここから示唆されることは、ゲストハウスは、地域を訪れる旅行者を受け入れる宿泊施設機能をベースとしつつも、その場を介して、旅行者と地域資源あるいは地域の課題との接点を創造するという地域の「窓[11]」になり得るという点である。

５．おわりに

本稿は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で被害を受けた仙台市内にある 2 つのゲストハウスの取り組みを基に、震災復興期におけるゲストハウスの可能性について考察を行ったものである。したがって、本稿で示唆した震災復興期におけるゲストハウスの可能性に関する示唆、つまりゲストハウスは旅行者と地域資源あるいは地域の課題との接点を創造するという地域の「窓」になり得るという点については、今後さらなる精緻化が必要である。

しかしながら、今後の被災地が抱える問題の 1 つに、被災地の現状やそれらが抱える様々な課題について、より多くの人びとに継続的に関心を持ってもらうための仕組みをどのように構築していくかという点が挙げられよう。その際に、ゲストハウスは、何らかの興味関心を持って仙台を訪れる旅行者やボランティアの人びとに対して、地域が抱えている課題を語ったり、地域のキーパーソンを紹介したりする役割を担えると筆者は考えている。

参考文献・資料等

『東日本大震災仙台市被害状況（平成 24 年 3 月現在）』http://www.city.sendai.jp/soumu/kouhou/bousai/0311jishin/higaizyoukyou.pdf（アクセス 2012_03_20）。
広井良典 2008「「コミュニティの中心」とコミュニティ政策」、千葉大学公共研究センター『公共研究』Vol.5no.3 page.48-72、http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00047666（アクセス 2012_01_13）
宮城県公式ホームページ http://www.pref.miyagi.jp/（アクセス 2012_03_20）。
仙台市公式ホームページ http://www.city.sendai.jp/（アクセス 2012_03_20）。

付記

本現地調査は、「東日本大震災現地調査研究助成金」によって実施されたものである。現地調査の機会を与えて下さった北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院に感謝申し上げます。また、ヒアリング調査にご協力いただいたゲストハウスの皆様に心から御礼申し上げます。

本現地調査では、本稿で記した以外にゲストハウスの皆さんが実践する貴重な活動に関するお話をいくつも伺うことができた。今回の報告書では紙面の都合で示すことができなかったが、学会発表などを通じて今後も発表していきたいと考えている。

[11] 広井（2008: 70-71）は、「『外部』との接点（あるいは外部に開かれた“窓”）としての性格を持つ場所が『コミュニティの中心』としての役割を果たしてきた」と指摘している。